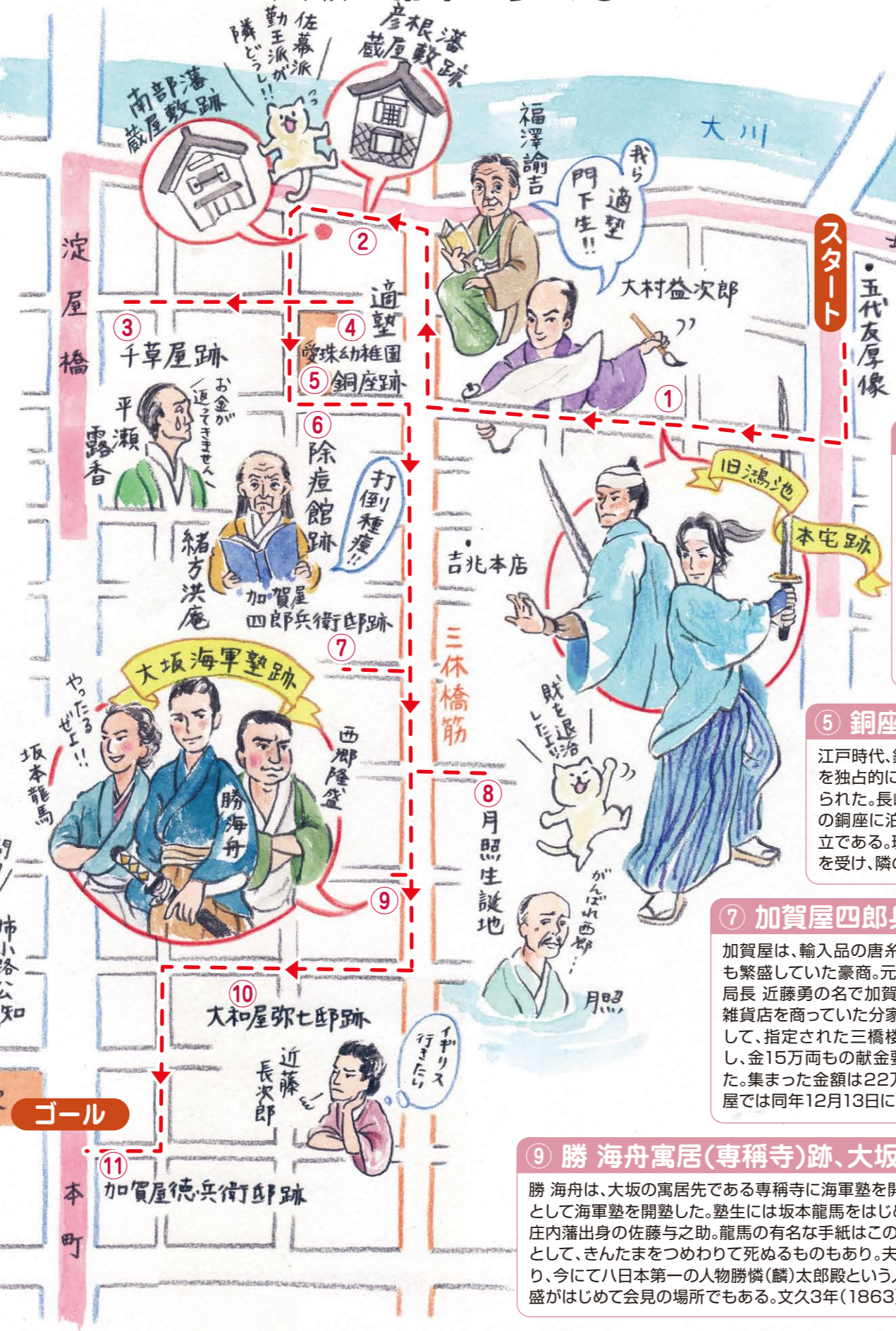


大阪は「まち」がほんまにおもしろい

# 勝海舟、西郷隆盛の邂逅・大坂海軍塾跡をゆく!

## ～大坂の幕末を歩く③～

かつて勝海舟は船場にある専稱寺に私塾・大坂海軍塾を開塾。土佐藩を脱藩した坂本龍馬も集って、この地で「今にて八日本第一の人物勝麟太郎殿という人にでしになり、日々兼而思付所をせいといたしおり申候」と手紙を書いています。また元治元年(1864)9月11日には勝海舟と西郷隆盛が初めて会見。互いの人物を認め合った2人が、再び出会うのが、江戸城無血開城の会談でした…。幕末の志士たちの数奇なドラマが交錯する船場を歩きましょう!



### 10 大和屋弥七邸跡

高知城下の饅頭商人の息子として生まれたため、初めは名字がなく、饅頭屋長次郎と呼ばれていた近藤長次郎は、江戸に出て学問と砲術を学び、その才能を山内容堂に認められ、文久3年(1863)に名字帯刀を許され、勝海舟の門下生になった。同じく土佐藩出身である坂本龍馬とは仲が良く、龍馬と共に海援隊の前身である亀山社中を設立した。勝海舟が専稱寺を大坂の寓居先として活躍している頃、長次郎は、南鍋屋町の町会所主である大和屋弥七の一人娘 お徳と結婚をした。「仲人は、大坂海軍塾の塾頭佐藤与之助が務めた」と長次郎の息子百太郎が書き残している。

### 11 加賀屋徳兵衛邸跡

「加賀屋四郎兵衛邸跡」を参照。

### 12 北御堂

北御堂(西本願寺津村別院)に文久3年(1863)4月25日、勝海舟が姉小路公知卿に謁見した。慶応4年(1868)1月9日、征討將軍仁和寺宮嘉彰親王が薩長軍を率いて大坂に入り本宮とした。慶応4年(1868)3月23日、明治天皇(当時16歳)が初めて大阪に行幸され、行在所を北御堂に置いた。

### 1 旧鴻池本宅跡

鴻池家は明暦2年(1656)から両替商を始め、ここに本宅が移るのは延宝2年(1674)からである。間口36間(約70m)の堂々たる店舗であった。他にもこの辺りは鴻池一族の店が多くあった。文久3年(1863)7月、鴻池に浪士数名が押し借りにやってきて、山南敬助・土方歳三が出勤し撃退した。鴻池は大変感謝し、刀を一振りずつ進呈したとある。この時期、攘夷のための武器料として、200両貰い受けたとの新選組の領収書があり、借用ではないことからこの事件の謝礼とも考えられる。

### 2 彦根藩蔵屋敷跡・南部藩蔵屋敷跡・鍋島河岸

江戸時代の大坂は「天下の台所」と呼ばれた全国第一の物資集散市場で、諸藩の米や物資の搬入・保管・売却にあたるのが蔵屋敷で、天保期には111の蔵屋敷があった。蔵屋敷は中之島を中心に堂島川、土佐堀川沿いに集中している。慶応4年(1868)1月、鳥羽伏見の戦い後、微妙なことになった。彦根藩は井伊大老の出身藩ながら、鳥羽伏見の後は錦の御旗側につく。南部盛岡藩は、藩内が佐幕派・勤皇派に分かれていたが、戊辰戦争は会津と共に奥州連合を結成し、官軍と戦うことになる。堀1枚へだてて、佐幕派・勤皇派の屋敷が建っているわけだ。そこに負傷して、南部藩への帰還を願い出たのが新選組の監察、吉村貫一郎だ。結局、吉村はこの蔵屋敷で自刃することになる。というのが、浅田次郎作「壬生義士伝」の物語に登場する。中之島をはさんで、南部藩蔵屋敷の対岸にあるのが佐賀鍋島藩蔵屋敷で、その門前の鍋島河岸は夕涼みの名所だった。文久3年(1863)6月、八軒家から舟で夕涼みに出かけた芹澤一行だが、途中、斎藤一が腹痛になり、岸へ上がったのが鍋島河岸である。ここで大坂相撲の相撲取りと喧嘩になり、その後、北新地で飲んでいたところへ、力士の団がやってきて、しじみ橋あたりで大喧嘩となった。

### 3 千草屋(千艸屋)跡

千草屋は鴻池・三井の次クラスの大きな両替商だった。ここにも軍用金の徴収に新選組は来ている。慶応3年(1867)12月初旬、戦を想定してか、土方歳三名義、保証人近藤勇の400両の借用証書が現存する。現存するということは、返してないわけだ。署名は彼らの自署ではないようだが、印鑑は自分で押したのかもしれない。千草屋の主人、平瀬露香は幕末・明治の粋人として、有名であるが、店は明治期の大動乱を乗り切れなかった。

### 4 適塾(適々斎塾)・緒方洪庵像

医者であり、蘭学者であり、優れた教育者であった緒方洪庵が、天保9年(1838年)開業と同時に開いた塾が適塾で、洪庵は日本全国から1000人近い塾生を教えた。門下生には橋本左内・大村益次郎・福澤諭吉・大島圭介・高松凌雲・佐野常民・手塚良仙など、多くの人材を輩出した。塾生は猛勉強をしたようで、塾頭を務めた福澤諭吉は、「およそ勉強ということについては、実にこの上にしようはないという程に、勉強しました。」と、後に書き残している。適塾の伝統は、大阪大学医学部に引き継がれていく。現在の建物は、寛政年間の建立で、その後も焼失を免れ、重要文化財に指定されている。2階の大部屋には、数多くの刀傷が残る柱や、学習部屋が残されている。緒方洪庵の銅像は平成8年(1996)2月に建立。

### 5 銅座跡・愛珠幼稚園

江戸時代、銅はオランダへの重要な輸出品であった。その銅の精錬と売買を独占的に管理する役所として、明和3年(1766)にこの地に銅座が設けられた。長崎のオランダ商館長たちが、江戸へ行くときには、大坂ではこの銅座に泊まった。愛珠幼稚園は公立の幼稚園で、明治13年(1880)設立である。現在の建物は、明治34年(1901)の建築で重要文化財の指定を受け、隣の適塾と共に、奇跡的に空襲を免れた。

### 6 除痘館跡

緒方洪庵の創設による。痘種が始めて長崎へ到来したのは、嘉永2年(1849)で、その後、除痘館が道修町から、この地に移ったのは萬延元年(1860)のことだった。種痘を広めようとした洪庵の努力にも関わらず、なかなか種痘法が広まらなかったが、大坂の町人たちの援助を得て、徐々に広まっていった。

### 7 加賀屋四郎兵衛邸跡

加賀屋は、輸入品の唐糸反物を扱う大坂の五軒問屋のうち最も繁盛していた豪商。元治元年(1864)11月15日、新選組は局長 近藤勇の名で加賀屋四郎兵衛を呼び出した。翌日、舶来雑貨店を商っていた分家の加賀屋徳兵衛が四郎兵衛の代理として、指定された三橋楼に向いた。近藤から大坂商人に対し、金15万両への献金要請を受け、問屋筋が度々会合を行った。集まった金額は22万5千50両になったようである。加賀屋では同年12月13日に銀60貫を近藤勇へ提出している。

### 8 月照生誕地

昭和初期まで佛光寺別院があり、文化10年(1813)、勤王僧 月照がここで生まれた。15歳の時、父に連れられ京都清水寺成就院に入室し、天保6年(1835)に住職となる。その後、弟 信海に住職を譲り、以後尊王攘夷運動に身を投じた。水戸藩 鶴岡吉左衛門、梅田雲浜らと密勅降下の画策に努めたが、安政の大獄により厳しい追及を受けた。同じく追われていた薩摩藩 西郷隆盛と共に京を離れ鹿児島に逃れた。しかし、薩摩藩は月照の入国を許さず追放。月照は覚悟を決め、日向へ向かう船の上で辞世の句を詠み、西郷と月照は、抱き合うようにして錦江湾へ入水自殺を図った。すぐに救助されたが月照は絶命、西郷は、奇跡的に一命を取り止めた。

### 9 勝海舟寓居(専稱寺)跡、大坂海軍塾跡

勝海舟は、大坂の寓居先である専稱寺に海軍塾を開いた。門地に拘らず、能力のある人材の発掘・海軍士官の養成、日本の海軍、いわゆる「一大共有の海局」を目指し、自身の私塾として海軍塾を開塾した。塾生には坂本龍馬をはじめ土佐脱藩浪士、各藩から教育の要請を受けた紀州藩士、鳥取藩士、福井藩士などがいた。塾頭は、海舟の片腕として活躍した庄内藩出身の佐藤与之助。龍馬の有名な手紙はこの地で書かれたと考えられる。「扱(さて)も扱も人間の一世八がてんの行ぬ八元よりの事、うんのわるいもの八ふろよりいでんとして、きんたまをつめわりて死ぬるものもあり。夫とくらべて八私など八うんがつかよくなほど死ぬるバへでよもしなれず、じぶんでしのふと思ふても又いきねばならん事二なり、今にて八日本第一の人物勝麟(麟)太郎殿という人にでしになり、日々兼而思付所をせいといたしおり申候。」 また、この場所は、元治元年(1864)9月11日、勝海舟と西郷隆盛が初めて会見の場所でもある。文久3年(1863)9月24日、勝海舟は神戸海軍操練所の開所準備のため神戸に移り、私塾も大坂から神戸の海舟邸に移された。

大阪あそ歩のコースは約2~3km、2~3時間程度を基準として作成されています。